ラブ・フォーティ
テニスに魅せられて　徳弘晴輝
「雅！ありがとう」　㉔

宮崎雅俊君が土佐塾高校へ進学することが決まりました。高校生になると部活動があるので、一宮テニスクラブでの練習量はぐっと少なくなりました。

彼は中学三年生で、すでに県のナンバーワンになるほど技術は向上していましたので、私は彼に「君に教えられる基本はほとんどなくなった。これから先は私から離れた所で、自分の個性を生かした”宮崎流„をつくると良い」とアドバイスしました。それからは、昼は学校で、夜は一宮での練習が続きました。

高校一年生のときの、全日本ジュニア 16 歳以下では、金中育人君(神奈川県)に決勝で敗れて、また準優勝でした。そのころからいよいよインターハイに向けて、県協会の強化が本格化してきました。その強化事業によって、亜細亜大学の堀内監督という、日本でも指折りのコーチに習えることになりました。また同大学のスエーデン人コーチ、ハーカン氏に、バックハンドを習ってインターハイの前から、さらにバックが安定してきていました。

宮崎君は、あらゆる点で人並みはずれた才能を持っていますが、私が特に感心するのが、度胸の良さです。

インターハイの準々決勝戦で、北海道の松永一記君との第３セットは、4−5 とリードされ、あと 2 ポイント取られると負け、というところまで追い込まれていました。その時相手のエース級の第１サーブを、バックハンドで思い切り振りぬくと、それがスーパーショットとなって、流れが変わり、そのゲームが取れたのです。次のサーブをキープして６－５リードとなり、最後のゲームはバックのリターンエース２本でマッチポイントを迎え、動揺した相手のダブルホールトで、宮崎君の勝利となりました。これを見ても、彼の精神力の強さを伺い知ることができます。

次の準決勝は同じ日にありました。相手は岡山県の五藤健介君でしたが、彼には直前の一宮テニスクラブでの練習試合で２度勝っていましたので、予想通り順当に勝てました。

決勝戦の 1998 年 8 月 8 日は、夏の日差しとスタンドを埋め尽くした大観衆の熱気が、コートを包んだ暑い日でした。相手は小学生のときから何度も対戦しながら、一度も勝てなかった、第一シードの田口亮太君（東京・堀越高）です。彼は団体戦を全勝で優勝し、個人戦もシングルスとダブルスの２冠を狙って、両種目とも決勝に進出していました。一方宮崎君は、準々決勝戦で逆転勝ちしてから絶好調になっていました。

試合は宮崎君のスピードのある、サーブとフォアの強打が冴（さ）えて、一度もリードを許さず、6−4，6−3 でついに日本一になりました。その瞬間、会場は歓声で沸きかえりました。

高校最後の桧舞台で、県民の大声援を受けながら、宿敵を破っての全国優勝は、私たちテニス関係者はもちろん、県民の皆さんに大きな感動を呼び起こしました。私は優勝のあと、万感の思いが胸に迫り、熱いものが込み上げてきました。彼に何と言おうかと考えましたが、すぐには言葉が浮かびません。出た言葉は「雅！ありがとう」でした。それは彼と二人三脚で 12 年掛けて、挑戦し続けた「全国の壁」を、今、彼が見事に打ち破ってくれたことへのお礼の言葉でした。

閉会式の挨拶で、全国高体連テニス部古賀通生部長が「この 40 年間、地元の選手が勝ったのを何度か見てきたが、これほど盛り上がりをみせた応援はなかった。第６シードからの優勝、テニスの世界にはそんなに番狂わせなどないが、宮崎君の優勝は私も見ていて、素晴らしく酔いしれた。甲子園で優勝した松坂君がもてはやされているが、宮崎君の優勝はあんなものではない。もっと素晴らしい価値がある」と言ってくれましたので、私はまた胸が熱くなっていました。